

追悼

高柳洋吉先生の逝去を悼む

北里 洋



日本古生物学会元会長、名誉会員高柳洋吉先生（東北大学名誉教授）が、2020年7月21日に逝去された。93歳であった。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

高柳洋吉先生は1926年に東京府北豊島郡滝野川町大字田端（東京都北区田端）において、法制史学者である高柳真三先生（学士院会員、東北大学名誉教授）のご長男として生まれた。1931年に父上の東北帝国大学赴任に伴い仙台に移られ、その後、生涯を仙台で過ごされている。旧制仙台第二中学校（現仙台二高）、旧制仙台工業専門学校を経て、東北大学理学部地質学古生物学科に進学され、1950年の卒業とともに東北大学理学部助手になった。1960年に白亜紀蝦夷層群の有孔虫研究で博士号を取得。1961年9月からは1年間招聘研究員としてアメリカ・スタンフォード大学に留学されている。帰国後、1971年に東北大学助教授、1974年に教授に昇任され、1990年に定年退官されて名誉教授になられた。東北大学定年後は石巻専修大学の非常勤講師をされているが、1997年に退かれたのちは、好きな読書や、東北大学地質教室、有孔虫研究史の編纂などの歴史を紐解くなど、お好きなことに時間を費やしつづつ悠々自適の生活を過ごされている。

高柳先生は、一貫して有孔虫を軸にする研究をされた。卒業研究「石川県金沢市付近の地質」の際、指導教官で

あった浅野 清先生から小型有孔虫類の手ほどきを受けて以来、助手時代は仙台市西部の鮮新統、竜ノ口層産の有孔虫化石の研究を皮切りに、北海道から四国に至る現生を含む様々な時代の地層、そして現生堆積物から得られる有孔虫の研究を行っている。先生は、有孔虫の殻形態を詳細にスケッチしながら記載分類を行い、それに基づいて群集の特徴を把握するオーソドックスな研究スタイルで業績を積まれた。先生の研究は、北海道の白亜紀蝦夷層群の有孔虫化石を研究されたとき、底生種のみならず浮遊性種をも扱ったことで、地域群集を主体とする分類学から浮遊性有孔虫を用いた生層序の確立、それを用いた広域対比へと一気に広がったのである。1961年のアメリカ留学が、研究の広がりには拍車をかけることになったと推測することができる。1960年代後半からは深海底コアを用いた浮遊性微化石のみならず、地磁気層序、同位体層序をも組み合わせた複合層序による国際対比計画、さらに全球的な古気候変動復元プロジェクトへの参画へと発展してゆく。高柳先生のご研究の変遷をみると、20世紀後半の海洋微古生物学の発展をリアルタイムで体现されたように見える。時代の流れに乗ることは悪いことではない。学問の流れを作るときにはマンパワーを供給することと人のために働ける人材を必要とするのだ。

先生の後半生における学問への貢献は、日本人による有孔虫研究史をまとめることであった。Takayanagi, Y. and S. Hasegawa, 1987, Checklist and bibliography of post-Paleooc foraminifera established by Japanese workers, 1890-1986. Tohoku Universityおよび、Takayanagi, Y., 1990, Bibliography of the literature on Foraminifera from Japan published during the years 1890-1989, including Japanese workers' contributions on materials collected from elsewhere in the world. Tokai University Pressは、Takayanagi, Y. and H. Kitazato, 2013, Foraminiferology in Japan: a brief historical review. The Micropalaeontological Society, Londonとともに日本における有孔虫の研究史を俯瞰する重要な文献である。1987年と1990年に出版された有孔虫文献集は、1990年に仙台で開催されたBenthos'90（第4回底生有孔虫国際会議）とともに、世界に日本の有孔虫学のポテンシャルを知らせる良い機会となった。その後、高柳先生にJoseph A. Cushman Award of Excellence in Foraminiferal Research 1993が授与されたのは、有孔虫国際会議の直前の1990年3月に急逝された浅野 清先生亡き後、日本の有孔虫学を指導された一連の流れをみると当然であった。

高柳先生は、日本古生物学会の運営に多大なる貢献をされた。評議員会幹事（1965-71）、評議員（1971-82）、会長（1983-85）を歴任され、1985年の学会創立50周年に際しては会長として学会の更なる発展への基盤整備と記念事業への遂行の任に当られた。さらに、日本学術

会議古生物学研究連絡委員会委員、同委員長として古生物学の発展に寄与された。この間、さまざまな国際組織の委員を歴任されている。国際地質科学連合 (IUGS) では、国際層序学委員会 (International Commission of Stratigraphy) の小委員会である Subcommission of Stratigraphic Classification の投票権をもった委員として長年、活動されてきた。この小委員会は、地質年代層序の枠組みを議論する重要な役割を持っており、委員には世界の層序学を牽引する錚々たるメンバーが名を連ねている。新生代の大区分である第四紀の基底が動いた時、第三紀が地質年代表から消滅したときに、先生は委員として議論に参加していたはずなのである。そのとき、どういふ議論をされたのか？ なぜ、第三紀が消滅することを承認されたのか？ 今は聞くことができないのが残念である。国際組織では、これ以外にも世界学術会議 (ICSU, 現 ISC) の海洋学委員会 (SCOR) の委員、国際深海掘削計画 (DSDP, IPOD, IODP) の生層序にかかるさまざまな委員会の委員を歴任されている。実に、輝かしい経歴をお持ちの先生である。

さて、私の高柳先生との関わりはと問われると答えるのは難しい。東北大学で博士課程を修了したときの指導教官は確かに高柳洋吉先生であった。どちらも、名前に「洋」という漢字が使われていて、誕生日が同じ (10月7日) であることも、偶然ではあるものの、事実である。その後の経歴でも、日本古生物学会評議員、会長をしたこと、古生物学会横山賞そして Cushman 賞を受賞したことなど、重なる点は多々ある。もっと親近感を持つべきなのだろう。ただ、1974年に浅野先生が退官されるまでは、浅野先生の指導を受けていたので、高柳先生とは師匠と弟子という感覚にはならなかったというのが実感である。なぜだろう。

たぶん、興味を持っている研究の方向、成功確率が50%以下であったとしても必要だと思えば実行に移してしまう、無謀ともいえる研究戦略をとるなど、研究のやり方が根本的に違っているからなのだろう。そういった私とは違い、高柳先生は伝統を重んじ、浅野先生以来の正統的なやり方で学問を進められた。有孔虫化石の地域集団の詳細な記載から始まり、確実なデータに基づいて話を組み立てていく手法を取る。研究スタイルもきちんとしている必要がある、それから逸脱することは、少なくとも彼自身には許されなかったのだと思う。もちろん種の同定もきちんとしていなければならなかった。彼から見れば私は劣等生である。種の同定についてはおもしろい話がある。第一回プランクトンカンファレンスの時のことである。スクリプス海洋研究所で浮遊性有孔虫の大家である、フランシス・パーカー女史がおもむろに10種類の浮遊性有孔虫が載ったスライドを取り出して、まわりの研究者たちと同定テストをやりはじめた。古海洋学の泰斗たちがのきなみ落第点をいただく中、なんと高

柳先生は満点を取ったのである。とてもすばらしいことではあるのだが、ちょっぴり複雑な気分にもなる。完璧なデータシートを作ることはもちろん大事なのだが、一方で、何か新しい物の見方を考えることも大事なのではないかと、私は思ってしまうのである。

高柳先生の場合、過去の研究をきちんとリファアーした上でつぎの研究を積み重ねることが何より大切だと考えていたのだろう。したがって、先達に対して絶対的な尊敬の念をもち、従おうとしているのだ。そう思わせるエピソードをあげる。2013年に世界各国の有孔虫研究史をまとめる英国の微古生物学会の出版プロジェクトに参画し、高柳先生とともに日本の有孔虫研究史を抄録した時のことである。その論説のなかに、戦前から戦後にかけて、日本の小型有孔虫による生層序が遅れた理由は何か？ という話題のパラグラフがある。「矢部長克教授が大型有孔虫の生層序に固執されたことが、戦後しばらくの間、日本の研究コミュニティが小型有孔虫の生層序に向かわなかった原因の一つである」という文を書き入れることになるのだが、高柳先生にはどうしてもその文を書くことができなかった。結局、その部分は、初校のうちに私が埋めたのである。高柳先生は東北大学地質学古生物学教室というか、日本の古生物学にとって雲の上の存在である矢部先生を傷つけるような表現はどうしてもできなかったのだろう。どんなに偉い先生でも間違いはある。それを乗り越えて、新しいことができるのだということ記録することは決して失礼だとは思わないのだが……。

先生に関して思いなおす機会があった。私の共同研究者である、チュービンゲン大学の Christoph Hemleben 博士が、あるとき、「高柳教授は自分の恩人なのだ」と言ったことに関係する。なんでも、彼が「生物学的視点から浮遊性有孔虫の進化を読み解く」研究を始めた時、世界の著名な有孔虫研究者たちに「君がやっていることは古生物学ではない」と公衆の面前で叱責されたことがあったのだそう。 (同様の経験は私もしたし、世界の Biogeosciences の創始者たちは多かれ少なかれ似たような経験をしている) その場に居合わせた高柳先生が、懇親会の折に「君がやっている研究はとても大事なことで続けるべきだ」と励ましの言葉をかけ、それをきっかけに彼は立ち直れたという話だ。これには正直、驚いた。高柳先生が、新しい分野の開拓をし始めた研究者を激励していたことを初めて知ったからである。先生が東北大学教授として在籍中、26名の学生を育て、いろいろな大学や研究機関に送り出していたことを、先生が亡くなられたあとで古生物学会の西会長から聞いたとき、その数字の多さを理解できなかったのだが、将来ある学生諸君にヘムレーベン氏にされたような激励を行っていたのだとすると納得がいく。私にもそういったお声かけがあったのかもしれないのだが、それを実感できなかったのだ

とすると、何とも不徳の致すところである。私としては、新しいことにチャレンジする若い方を激励し支援することで、先生への恩返しができればと思っている。

先生は、日頃から健康に気をつけておられたようで、在職中は6階にある研究室まで階段を使って上下していたとのことである。晩年になってからは、ご夫妻で毎週のように体操教室に通っていたのだそうで、耳は聞こえにくいもののすこぶるお元気で、食欲もあったとのこと

である。それが2日前に急に体調を崩され、ご家族に見守られつつ静かに息を引き取られたと伺った。大往生である。

仙台のお宅には弘子夫人がご健在であり、また、長女真紀子さん、次女恵里子さんはそれぞれご家庭を築かれていらっしゃる伺っている。ご家族の安寧とご健康をお祈りする次第である。

